

平成 21 年 5 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19730153  
 研究課題名（和文）  
 F・ナイト研究：1930年代の資本論争における彼の理論的・思想的位置をめぐって  
 研究課題名（英文）  
 Study of a Frank Knight's standpoint in the 1930's capital controversy  
 研究代表者  
 黒木 亮（KUROGI RYO）  
 獨協大学・経済学部・専任講師  
 研究者番号：90364728

## 研究成果の概要：

F・ナイトがオーストリア学派の資本理論などに対して展開した批判的議論をはじめ、主に1930年代に執筆した理論的論考の再検討を通じ、彼の経済理論家としての意義や限界を浮き彫りにするだけでなく、ニューディーラーやケインジアンらニュー・リベラリズムの政府介入に対して一方で異議を唱えながら、他方で後にハイエクらのネオ・リベラリズムをも強く批判することになるナイト固有のリベラリズムの特徴を、彼の「複眼的思考」に見出した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	300,000	2,300,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想

キーワード：フランク・ナイト、1930年代、資本理論、リベラリズム

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、もともと2006～07年度の本補助金受給対象研究「F・ナイト研究：シカゴ学派の起源及びその自由主義思想の意義と限界に関する基礎研究」（課題番号：17730142）の遂行中に構想されたものであった。今日のネオ・リベラリズムの淵源の一つであるナイトのリベラリズムの基盤をさぐった後者の研究対象は、主に1920年代、す

なわちナイトのアカデミックキャリアの初期に彼が執筆した哲学的・倫理的論考が中心であったから、ナイト研究をさらに発展・深化させていくためには、当然、1930年代にナイトが遂行した経済理論研究への理解を深めていく作業が不可欠となる。なかでも1930年代前半に彼がハイエクやカルドアらとの間で繰り広げた資本論争は、そのよい糸口になるのではないかと。これが本研究開始当

初の、より正確には本研究を着想したそもそもの背景である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、オーストリア学派の資本理論に対してナイトが展開した理論的・方法的批判の再検討を入口として、経済学に対して重要な貢献をなしたとされるナイトの資本・利子研究の意義や限界を解明し、いまだ明確に示されているとは言い難い貢献の中身、あるいはその中身が明示されがたい根本的理由などを探ることにある。

## 3. 研究の方法

(1) ケンブリッジ大学・キングズカレッジ Archive Centre において、Nicholas Kaldor Papers、John Maynard Keynes Papers、Richard Kahn Papers の調査を行い、1930年代の資本論争に関わる資料だけでなく、後にマネタリストとケインジアンないしポスト・ケインジアンの間で争われた論点にも関わる資料の収集を行った。

(2) スタンフォード大学のフーヴァー研究所において、Fritz Machlup Papers、Friedrich von Hayek Papers、Milton Frideman Papers、Eric Voegelin Papers を調査し、主にマニスクリプトを中心に資料の複写・収集を行っただけでなく、ネヴァダ州立大学の Lied Library・Department of Special Collections において、Charles P. and Delphine Squires Collection を調査し、フーヴァーダム関連の資料やフーヴァー大統領の書簡等の複写・収集も行った。

(3) 上記 (1)・(2) で収集した資料の整理、以下「4. 研究成果」、「5. 主な発表論文等」に列挙する論文等の執筆、翻訳書『競争の倫理——フランク・ナイト論文選——』（ミネルヴァ書房、2009年5月）の下訳・校正・解説執筆等々を通じ、ナイトが1920年代に追究した社会科学方法論から1930年代前半の資本論争を経て、1930年代後半以降のケインジアン批判やリベラル批判へ、そしてさらに最晩年のネオ・リベラリズム批判へと至るまで一貫して保持しつづけた理論的・思想的見地を追跡し、いわゆるシカゴ学派の方法的見地とナイト固有のそれとの連続性や異次元性の明示、ならびに彼の学史的位置の確定を模索した。

## 4. 研究成果

(1) これまで訳出されることがなかったナイトの重要な論文「景気循環・利子および貨

幣——方法的アプローチ——」“The Business Cycle, Interest, and Money: A Methodological Approach”(1941)を下訳[フランク・ナイト『競争の倫理——フランク・ナイト論文選——』（高哲男・黒木亮訳、ミネルヴァ書房、2009年5月）所収]し、ナイトがベーム-バヴェルクの資本理論のもつ現実的含意をどのように理解していたか、その一端を示す重要な議論を紹介するだけでなく、ケインズやヒックスの利子理論に対するナイト自身による批判的解説、さらには積極的で裁量的な金融政策の必要性を主張したナイト自身の、すなわちフリードマンともハイエクとも異なる彼特有の金融政策論の一端も紹介した。

(2) 上掲の訳書に収録されている「解説 フランク・ナイトの複眼——思索の多面性と重層性——」を執筆し、ナイトが1930年代の資本論争、ならびに流動性選好説批判等によって果たした学史的役割が批判者としてのそれにとどまったこと、いいかえれば、資本・利子理論発展の「黒子」役にとどまった、というナイトの理論家としての限界を指摘すると同時に、まさにその点を一つの端緒として、フリードマンの実証経済学や貨幣・景気循環研究が「派生」してきた可能性もある、という新たな学史的謎の存在も示唆した。

(3) シカゴ学派の重要な特徴とされる実証的・数量的調査研究に対し、ナイト自身は極めて批判的・懐疑的態度を終始一貫とりつづけた理由、とりわけその認識論的根拠が明示された初期の哲学的論考“Economic Psychology and the Value Problem”(1925)を訳出し、フランク・ナイト「経済心理学といわゆる価値の問題」として『獨協経済』第84号(2007年8月)に発表した。

(4) 第13回アメリカ経済思想史研究会のシンポジウム「アメリカにおける新自由主義の確立と展開——1920～30年代を中心に——」(2007年10月20日:日本大学経済学部)において、研究報告「F・ナイトにおける自由主義とその哲学的・経済学的論拠」を行い、ナイトが1920～30年代に展開した様々な議論を紹介しつつ、彼が一方でケインズらのニュー・リベラリズムやその後のリベラルに対して強い警告を発しながら、他方で後にフリードマンやハイエクのネオ・リベラリズムに対しても厳しい態度をとった重要な論拠が以下にあることを指摘した。

すなわち、古典的リベラリズムであれ、ニュー(あるいは後のネオ)のそれであれ、リベラリズムには本来的に「財産の自由」等の経済的自由への神聖視が内在しているため、社会問題としての個人的自由の問題を半面

しか捉えられないという根本的問題を抱えており、なかでも倫理的判断や道徳的感覚、現行の権利・義務関係が絡む社会問題としての側面を直視できない点こそが重大である、との基本認識がナイトにはあったこと、そして以上の問題点からの必然的帰結として、当時の自由主義者ないし経済学者が経済・社会問題に対する適切かつ有効な解決策を提示しえないまま足踏みを続け、それと気づかないまま、個人的自由の喪失を招きかねないほど危険な経済政策や秩序の混乱を自ら呼び寄せる事態に至っている、との危機感が1930年代当時のナイトにはあったこと、これである。

(5) 論文「フランク・ナイトにおける社会科学の哲学的基礎づけとデータとしての価値」(『獨協経済』第85号, 2008年11月)を執筆し、前年に訳出したナイトの論文“Economic Psychology and the Value Problem”(1925)の趣旨や意義をめぐる批判的検討を行い、ナイトが科学主義と道徳主義の双方に対して批判的態度をとった認識論的根拠だけでなく、彼から「派生」したと考えられる後のシカゴ学派との方法論的連続性と異質性が、以下の点にあることも浮き彫りにした。

すなわち、ナイトも、後のシカゴ学派も、経済理論にとっての「所与」や「前提」に何より批判的な目を向け、現代経済学の発展に重要な足跡を残した点において重要な共通点・連続性を有してはいるが、他方でナイトが、そうした「所与」や「前提」それ自体の考察にまで経済学的手法を適用したり、実証的アプローチの採用することに対しては極めて批判的かつ否定的な禁欲的態度を堅持し続けたという点において、後のシカゴ学派の主要論者とは決定的に異なるということ、これである。

(6) 科研「20世紀イギリス経済社会改良思想の研究」研究会(2009年3月8日:九州大学経済学研究院)において、報告「フランク・ナイトの経済思想史上の位置をめぐる——その複眼の由来と背景を手がかりに——」を行い、今日の「小さな政府」論やネオ・リベラリズムの伸長に対して少なからぬ影響を及ぼしたという意味において20世紀を代表する経済思想家の一人といっても過言ではないナイトの思想が一般にはほとんど知られていないという事実、あるいは知られていたとしても誤解を招きかねないものが多いという現実やその背景を検討し、その根本的原因として以下の3点を指摘した。

すなわち、第一に、「複眼的思考」とも表しうるナイト特有の思索スタイルの“存在”、第二に、そうした特徴を持つやや錯綜した論

考を何とか読み終えたとしても、そこからポジティブな含意を見出すことが基本的に難しいという難点、第三に、そうした難解さやネガティブな特性をもつ多様な思索活動全体の意義や相互の関連性を分かりやすく、体系的に解説するような書物をナイト自身が1冊も残さなかったという学史的事実、以上である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

- ① 黒木亮、「フランク・ナイトにおける社会科学の哲学的基礎づけとデータとしての価値——『経済心理学といわゆる価値の問題』の意義をめぐる——」、査読無、『獨協経済』第85号(2008年11月): 1-26.

〔学会発表〕(計 2 件)

- ① 黒木亮、「フランク・ナイトの経済思想史上の位置をめぐる——その複眼の由来と背景を手がかりに——」、科研「20世紀イギリス経済社会改良思想の研究」研究会(2009年3月8日:九州大学経済学研究院)
- ② 黒木亮、「F・ナイトにおける自由主義とその哲学的・経済学的論拠」、第13回アメリカ経済思想史研究会シンポジウム「アメリカにおける新自由主義の確立と展開——1920~30年代を中心に——」(2007年10月20日:日本大学経済学部)

〔図書〕(計 1 件)

- ① 訳書 フランク・ナイト『競争の倫理——フランク・ナイト論文選——』(高哲男・黒木亮訳、ミネルヴァ書房、2009年5月): 281 pp.

〔その他〕(計 3 件)

- ① 黒木亮、「解説 フランク・ナイトの複眼——思索の重層性と複雑性——」、『競争の倫理——フランク・ナイト論文選——』(高哲男・黒木亮訳、ミネルヴァ書房、2009年5月): 257-278.
- ② 黒木亮、報告要旨「F・ナイトにおける自由主義とその哲学的・経済学的論拠」、「アメリカ経済思想史研究会ニューズレター」、No.13(2008年9月): 7-11.
- ③ 黒木亮 訳、フランク・ナイト「経済心理学といわゆる価値の問題」、『獨協経

済』第 84 号 (2007 年 11 月) : 109-129.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒木 亮 (KUROGI RYO)

獨協大学・経済学部・専任講師

研究者番号 : 90364728

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし